

狂言の構成

齋藤清衛

狂言はいうまでもなく、能楽と能楽との間で、狂言師というものがあり、滑稽諧謔を主として演じて観客の興を唆った劇の一種である。起源は中世中期であるらしいが、現代の演能にも上演されている。その戯曲の代表として「大蔵流」（その中に虎明本と虎寛本の別がある）「鷺流」「和泉流」の三種類があって一致を見たいが、その初めは口伝口誦であったことは疑問要しない。更に発生期から時代を下るにおよんで秘伝された語句が多少変遷していったことも確実である。それは芸術の起原は、演劇にあったとさえ美学者は述べているが、戯曲の上演ということと文芸美術の発生との間には緊密の関係がある。古代演劇のせりふは、そのまま残されていないが、口語が中心であったことは推定できるところで、その研究は日本言語学には重要な交渉を持っている。特に喜劇においては日常語が主として用いられたに相違ない。靈元天皇の寛文、嘉永の年号のあった時代が、永く口授乃至墨書にすぎなかった狂言楽が初めて版行されたので社会は歓喜してそれを繙き味わった。その中には、謡曲に比較して差別が少なく、敘事文本位のものも交っている。しかし「狂言記」の各曲に登場する人物は、能楽同様に少なく、「大名」（多分に「主」として書かれている）「冠者」「ワキ人」の三人位であり、特殊の構想のものにでも五六人程度にすぎない。これが「続狂言記」では、シテ、アドと書かれている例が多いけれど「大名」「冠者」のものの変るところはない。本論は、狂言の実演が社会に歓迎されたい江戸時代初期の時代思潮、特に日本人の好んだ喜劇の性質を考えて見ることにして、大蔵流、鷺流、和泉流（野村派、三宅派の対立あり）の相違点を比較することや、「狂言記拾遺」の考察を省略する。ただしここで疑問とされる点は、研

究雑誌などにおいて、狂言の研究が甚だ乏しいことである。西欧ギリシヤの演劇は喜劇から首途したとさえ考えられているのに、国文学における日本人の笑の特殊さについて、深く検討されていない。拙論ながら私見が何程かの寄与、示唆をなすことができれば幸である。

さて作品数であるが「狂言記」は五冊の各巻十篇を入れ計五十となり、「続狂言記」も五冊五十篇という仕組になっている。ここでは「狂言記拾遺」を省略し、正統百篇についてのみその着想や統計やを公表するに留める。和泉流の名は、「名古屋市史」によると、近江坂本に狂言好の隠士佐々木岳楽郎という人があり、甥の佐々木源次郎に狂言を伝誦させた。その源五郎は幼名を和泉といい、京都で狂言師になっていたが後坂本に帰郷した。しかし実子に源助があり、これまた狂言師として京都で一流を樹立した。その後慶長十九年(1614)に到って尾州藩に抱えられたので、和泉流には尾張三河あたりのものが多い。喜劇は民衆性を含み、神代記の中でそれらしいものが鑑賞されていたので、庶民生活との交渉は深い。

さて狂言が現代のものにも座興を催す所以は、喜劇を求めるわれわれ自体の生活態度にある。諧謔味、可笑味、滑稽の所作等、喜劇の扱い方を分析することは、狂言記百篇でいかにも不可能に近い。しかし、和泉流の巻の一を分類するだけでも、狂言独特の型を捉えることもできる。登場人物の少いことは前説した通りであるが、如何ような人物(その他、閻魔、鬼、幽霊、鶯の出された曲もある)を採用しているかについては、本論の結末に書くこととして、すべてを階級的に、(1)大名貴族(時に殿ヌシとも書かれている)(2)法師山伏の類(3)大名に仕侍している冠者(曲によりアドとなっている)(4)目代、武士(5)平民ならびに芸人(6)悪人乃至盗賊等——の六種に分けることができる。もとより、京人、遠国者、聾、をひ、ちぢ百姓というような名も見られるが、概ねに(5)の平民の一部だと解しておきたい。これらの人々は、狂言の歓迎された室町末期時代、狂言見物に心を訴えるところあった階級で狂言作者が注目したものであることは疑いない。由来、狂言作者について初

代玄恵法師が計五十九曲を構案し、その後日吉弥兵衛、日吉弥太郎、日吉弥次兵衛、日吉弥右衛門等が考案したとの旧説に対し、まったくその伝説を疑うものが多いけれど、「平家物語」「謡曲詞章」などと同様に時代につれて改作された跡が見られるから、講想書^{がき}を数人以上予想することは無理でなく玄恵がその中の一人であったということも考えられる。

玄恵（慧ともかく）は太平記の筆者として伝えられている天台僧。「尺素往来」もかれの筆致とされているほか後醍醐天皇に昌黎文集を侍講した程の学僧であり、独清軒と号し、飄逸な社会観を持っていた。諸派の相違、某曲が多少の差違で二様三様に別れて口伝されたものもあって、現代に遺された曲数は限定できないけれど、玄恵のような才幹ある学僧により三四十曲講想されたらしいことは、強いて否認すべくもない。新井白石著「俳優考」にも以下のような解釈が下されている。

室町殿ノ比ニ、狂言ト云ヒシ者ハ、其ノ様ハ古ヨリ有リシ狂言ヲナセシニハ非ズ。其ノ時ニ臨ンデ珍ラカニ、ヲカシキ事ヲ作り出セシ也。髮結フコトヲ嫌ヒシ狂言ハ、其ノ比ノ鎌倉殿ノ御事ニテ、人ノ誉ムルコトヲ悦ビテ、物打クルル狂言ハ其ノ比ノ公方ノ御事也。詞ヲサカシマニシテ云フコトハ、其ノ比ノ東国ノ俗ニテアリシヲ、其習ハシノ都ニウツリテ、ヨキ人々モテ興シ玉ヒシコト也。其ノ比ニハカク其君ヲ正シ参ラスベキ事ヲ、狂言ニ取リナシテ諫メ参ラセル也。末ノ世ニハ有ガタキコト也。

能狂言における一部の上演心理を解説したにすぎないけれど、とあれ観客がそこに望むものがあつたことの事実を説明している。狂言実演、観賞にも理想があり目的のあつたもののように論じているのは、白石などの口ぐせだけのものである。ところで百曲のものテーマであるが、殊更喜劇性、可笑性もなく、さりとて教養的内容も含まない。いわば狂言の劣作も相当交っているが、一通り一曲として出来あがつたものの作者心理とでもいうものを分析して見ると、ほぼ以下の六種に概括することができよう。これは後説する登場人物の階級性、風俗別、背景をなす地方別などと関係あるところであるが、最初の問題から取上げて見たい。

(1) 過度の物忘れ症

凡そ、お互の記憶力の不確実なことは余儀ないが、過度に記憶をなくするという例も甚だ多い。即ち健忘症であるが、笑いの種として狂言には可なり採用されている。もとよりその度忘れが、ある機縁で思い浮かべられる可笑性のものであるが、曲名を拾うと以下のようなものである。

鳥帽子折（狂言記巻之一） ひめ糊（同前）

萩大名（同前） 末ひろがり（同巻之三）

粟田口（同前） 伊文学（同巻之五）

文蔵（同前） 宝の笠（続狂言記巻之二） 岡大夫（同巻之三）

目近大名（同巻之四）

- 鳥帽子折——元旦の前日大名が出仕の用意に臣の藤六に鳥帽子の剥目を塗って修繕させるため、今一人の臣の下六には鳥帽子紙を求めさせて出したが、返り路を忘れ、藤六が出迎えにゆくが兩人とも主君の邸を忘れてしまう。よぎなく兩人は「信濃の国の住人、阿蘇殿の御内に藤六と下六と鳥帽子に参り主の宿を忘れて囃子事をして行く」と道中囃子物をして歩く処へ、大名が絶えかねて探しにきて「如何にや如何に、汝等、主の宿を忘れて囃子物をするとは前代の曲者、身が前へは叶ふまい」と憤るが、囃子振の面白さに健忘罪を見許しにする、という筋。家を出る時は、未だ門松が立ててなかったが、帰ってくると五三飾があるので主家と思わなかったという随分の思か者だが、そうした臣を見許しにして一緒に囃子物を興ずるといふのも稀な主である。観衆には極めて軽い笑いを催させた劇であったであろう。
- ひめ糊——講想が類しているが、ある一人の殿が、出仕の前日、紺屋にやった肩衣が出来ないので冠者を受取りに使わず。それは紺屋で使うひめ糊がその時不足していたためなのであるが、冠者はかつて云われたひめ糊という名を忘れ、殿に対し「殿様のいつも四畳半敷へ取籠らしやれて、読ませらるるもの本の内に有るかと存ずる」とうら臆えを語る。そこで、殿は「某が好いて読むのは、源氏平家の物語などを読むほどに、一つ二つ読ま

うほどに有らばあるとを答へよ」という。長々と読んでゆくが冠者にとっては案じがつかぬ。最期に『行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし』と詠じ給ふは、平の薩摩の守忠度にてはなきか」と云われ、冠者はつと^{おのれ}思い付「それでした。」と答へると、主殿は「やい、そこな奴、巳言葉のすゑで聞いてゐる。紺屋に使ふは賤がひめ糊にてある。そこで殿は某の内にあらうずる奴めが「ひめ糊」「忠度」のわけ差別も知り居らず、大ほね折らせ大汗を流させる前代未聞の曲者」と怒るところで結ばれている。語られたことばを度忘れした時、類音の関聯から記憶に浮べる事は必ずしも珍しくない。本曲は忠度とひめ糊とを並べて出したところに作者の妙味が覗かれる。

- 萩大名——物憶えの悪い一大名が、ある秋、冠者を伴れ、京都下京辺の萩見物に出かけた。萩庭では和歌を詠む用意があるので、同伴の冠者から「七重八九重重とこそ思ひしにとへ咲き出づる萩の花かな」という一首を教えられたが、物忘れの大名は忘れがちになる。そこで、冠者が「七重八重」という時に扇の骨を七本八本広げるから、それで思い浮かべ「萩」というべき所では、冠者の^{すねはき}脛脛を聯想したら、よかろうと指示する。この歌は、庭主の賞美する所となったが、冠者が席をはずした時、「短冊に書きます。最一度吟じさしやれませう」と云われたが、大名は早くも歌詞を忘れてしまい、「萩の花かな」という結句が胸に浮かばない。亭主が「字が足りませぬ」と促す「太郎冠者が向脛に、某が鼻の先」と、時折冠者を折鑑していたのを思い返し訳もわからぬ返事をする。愚鈍な大名を人物としたものは「愚大名」その他、数曲あるが、時流の反映であろう。殊更かれ等を諷刺するため取材したのではなく、室町時代の社会現象としてこの種のものを戯曲化したものと推察される。
- 末ひろがり——これは同じく冠者の物忘れ談。京大名が冠者に命じ「末ひろがり」を買わしに出した所、冠者はその名を忘れ「末広屋は存ぜぬか」と尋ねているのを悪人すりが見付け古い傘を売付ける。大名は憤ったが、その古傘で面白く囃子を舞ったので大名を喜ばし冠者は馳走までしてくれ

た。大名は烏帽子折のそれと似ている。冠者にとっては平常、なじまない「末ひろがり」という語より何かの交渉で「末広屋」が頭にあったので、かかる失敗となったものと見られる。

- 粟田口——登場人物、筋が「末ひろがり」によく似ているから考察を略する
- 伊文字——大名、冠者、道行人の登場するところ、冠者が聴いた和歌の下の句を忘れたところ「萩大名」に類似している。
- 文蔵——登場人物は殿と冠者だけであり、テーマは前述した「ひめ糊」とほぼ同然である。冠者「うんそうの貝」の名を忘れ、殿が源平盛衰記を読んで、その中に「文蔵」の句が出てきた時、はたと記憶を取戻すことになっている。
- 室の笠——これは、前述した「末ひろがり」と同型。但し、主をアドとし冠者がシテとなり、すりにだまされて買った品が笠となっている。それを為朝の伝説に結び「昔鎮西の八郎為朝と申すお方が鬼が島へごったれば、鬼どもが取って服せうというた。いやいやむざと服せられまい。何んでも勝負をせうと仰せられて、いろいろ勝負に勝劣あり、則ち鬼が島で取ってござった隠笠でおりやる……」と偽談を説く場面もある。結びはシテが自分の失敗を主に対し「あゝ悲しや、許させられ許させられ」と云うような悲嘆を示すに終わっている。
- 岡大夫——簪入の席で「わらびもち」を馳走されながら、簪はその名を忘れ、帰宅して女（妻）に「藤木夫とやらいはれたが、老子にも載ってあるといはれた」云々と説明出来ぬので夫婦争となった時、女が「紫塵ものうの頼さは蕨一手をとりていふが、此のことであろう」といった一言に、蕨餅であったことを思い告白すると、女は「それは妾が仕様を知って居ます。拵へて進ぜうぞ」と夫婦和解することで終わっている。
- 目近大名——これも「末ひろがり」系の講案でシテ（大名）が参会進上品に目近籠骨め ちかこめぼね（註、扇の種類）を太郎冠者、次郎冠者に命じ京に買いに行かせる。両人は京見物かたがた勇んで出かけるが目近の籠の店を忘れてしまう。そこで太郎は「目近屋は其処許にないか」と叫び、次郎は「籠骨屋は

おりないか」と叫んで歩くのを詐欺のアドに偽物を売付けられ、もし大名が怒ったら「千石の米ばね、万石の米ばね、身近に持って参った」と囃子を歌えと教えられ万疋の高賈で買受ける。果して大名は憤ったが、例の囃子を騙された身ながら歌い初めたので、機嫌を直し「げにもさあり、やよ、げにもさうよのさうよの……」と座興することで結ばれている。

(2) 無意味の論争

社会生活には様々の現象があるが、相互のものが無意味の論争や、私論を戦わすことは、古今かわりはない。室町時代のように、無智の庶民が目立った時代は、終日わけも分らぬ争論が行われていたので、代表として以下の曲を列挙することができる。

宗論（狂言記巻之一）^{すはせかみ} 酢 薑（同前）桜 諍（同卷之四）舟 ふな（同卷之四）
 濁鼓炮碌（同卷之五）^{えび} 姪子大黒天（続狂言記巻之二）雞立の江（同前）
 竹子争（同卷之三）膏 菓煉（同卷之四）牛 馬（同卷之五）

- 宗論——昔の族では、知人でないものと同行する例がよく見られるが、折角の同伴が、自分の自慢から争論の原因になることが多かった。この曲は、浄土宗の黒谷の僧と、法華宗の本国寺の僧とが、身延山、善光寺参りの帰途同伴し、訳もない宗論をする滑稽さを主題としたもの。宗論に関してだけ次に述べる酢薑や桜諍やに較べるとその理由が認められるが、要するに争論を好むのは人間の本能かもしれない。
- 酢薑——山城人の薑売と、和泉人の酢売とが、各々自慢の末、薑売はからく（？）天皇、酢売の方は推古天皇の子孫で相互に系図争いをするを主眼としている。
- 桜諍——主のアドが、シテの太郎冠者と同伴して、桜見物に出かけ、シテが「花」と呼ぶに對しアドは「桜」と称すべきだと古歌を互に引用して、用語の争をする。シテが「桜ちる木の下蔭は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」を挙げると、アドは「行きくれて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし」の歌を引証するというように、両人が口論する、最後はアドが

「総別何も知り居らないで、むざとしたことをいひ居って、^{それが せり あ}某と競合ひ居る、彼方へ失せい」とシテを追放することになっている。言語学上には多少の意味がある。用語の是非論である。

- 舟ふな——桜争と同巧異曲のもので、殿が冠者を伴い、神崎の渡を舟でわたろうとする時、冠者が「ふなやい」と船頭を呼んだに対し、殿は「左様に呼うだ分では来まいぞ。ふねというて呼べ」とすすめ、証歌として兩人古歌をひいて争い、また「謡」の一節まで出して「舟」か「ふな」かを云い争う。結末は殿が腹を立てて「何でもない事、退り居ろ」で終る。
- 羯鼓炮礮——狂言の中には新市を背景に採ったものが数曲あり、店員同士が論争を始め目代が出てそれを仲裁するというような筋があるが、羯鼓炮礮（わさなべ）もその一種で、一の棚を占めることに羯鼓壳と炮礮壳とが争を始め目代が中に入るといことになる。羯鼓壳の言に「土炮礮などは飾らすものでは御座らぬ、づつと市末へやらしやれませ」といって、自らに系図のあることを誇り、古歌を引用したりする。目代も判断しかねて、兩人に棒を振るわし勝負を定めることにさせ、炮礮商が、羯鼓商の棒を借り、「ほっひやとうろひやりとうろろうろ」と打つと、羯鼓商は「あの音も見事打ってござる。今度はを相手にいたませう」と却って興悦して相打で「ほっひや……」と打って争は円満に解決する。狂言における論争はこの程度の結末が多い。
- ^{えびす}姪子大黒天——摂津人アトが、最上吉日を選び、平生信仰している西の宮の姪子と叡山の三面の大黒に勧請の式をする。そこで両神下山し、姪子は「福貴」を取らせうといい、大黒は「楽しみ」を取らせうという。なお、天照大神の三番目の弟たるため西の宮恵比子三郎と呼ばれ、伝教大師の叡山三千の僧徒を守護する山の表から大黒と呼ばれていると、相互に由来を語る。これら一片の伝説にすぎないけれど当時の民間信仰を裏付けているもので、民衆の興味を誘った話となったものであろう。
- 鷄立の江——これも前出した「舟ふな」と同列に、「鷄は鳴く」のか、それとも「鷄は唄ふ」のか、用語についてアト主とシテ太郎冠者とが論争す

ることを主眼にしている。太郎冠者は主人から用事のため「一番鶏のうた時分に必ず来い」と命ぜられたものの寝過ごしをしてしまった。そこで鶏はうた唄ふとこそいへ、鳴くとはいはぬ、と主の言ったことから故実考証となり、両人が相互に古歌、古詩を引用する。和歌以外に唐詩の例、謡の例なども出される。曲はそれで終わっている。

- 竹子争——シテ所有の籐の竹子が、隣家（初アド）の庭に伸びて頭を出した。アドはそれを抜こうとしてシテとの論争となる。正しい所有者は何れか。ところで、シテの庭で、初アドの牛が子を産んだ事件があり、シテはアドに仔牛を渡したことから正否が定まらず、兩人古歌を案じ出して正否の勝負をしようと、終には角力の勝ち負けによって定めようなどする。
- 膏葉煉——鎌倉人（アド）の膏葉煉と京人（シテ）の膏葉煉とが相互にその効能争をするのである。アドが「某の膏葉には系図があるが、我御料（註、シテ）の膏葉にも系図があるか」と問責する、シテが「なるほど此方にもある」云々と問答が始められ、アドが「扱も昔頼朝の御代に」云々と説明してそれが終ると、シテが「扱も平相国浄海の御時、御庭を作らせられしに」と喋々と由来を述べ合うのである。アドは薬味として雷、胴亀、蛤を用いると語り、シテは同じく薬味に白鳥、赤犬の生胆、三足の蛙を使うと吹嘲する。当時薬学未進歩で漢法薬めいたものが喜ばれたのである。こうした俗信めいたことが到る所にあったものだと思われる。
- 牛馬——馬と牛の博労の論争であり、牛馬の新市が背景となり、目代が仲裁するところ、前述の羯鼓炮碌と同一型である。明きらかに世相の反映であって、類似の事件が地方々に生じていたに相違なく、観衆はそうした論議に興味深く耳を傾けたものであろう。

(3) 不具者の奇行

不具者は総じて憐愍の対象となることが多い。つんば、盲人等々。しかし身に余った悪戯をする不具者となると、嘲笑される。いわば身の反省なしに行動するからで事は失敗に終る。狂言には座頭を登場させた例が特に多い。

次にその代表的なものをあげてみる。

どぶかっちり（狂言記、卷之三） つんぼ座頭（狂言記、卷之三） 三人片輪（同、卷之五）

- どぶかっちり——勾当が、菊一に誘われ嵯峨詣をする途中、かい川に差掛り、橋が無いので菊一が勾当の盲人を背負って渡すことになる。そこに悪心の道行人がいて、勾当の目の見えないのを宜いことに、菊一に背負われ巧く河を渡る。そこで勾当が「汝ばかり渡って、何故に又其方へ行かしたぞ……」と叱る。菊一は再び河を渡り返り、勾当を背負うて渡るが深瀬にはまり腰を濡らしてしまう。河岸で携帯の竹筒（酒）を飲んで休む時も、その道行人が勾当の飲むように見せて菊一の持つてゐる酒を飲んでしまう、結びは勾当がやるまいぞやるまいぞというに続いて道行人はわゝと嘲笑するに終る。これは片輪であるため生じた奇談である。
- つんぼ座頭——主人が二三日不在する留守居として、使用人（シテ）と髻と座頭菊市（冠者）を依頼したところ菊市が「若し盗人が這入ったら身どもが耳で聞きつけて、其方の膝を突かうほどに、それを合図に防げ」と一案を出す。座頭という者は智慧の深いものぢやと讃められ愈々留守の際中、菊市が淋しいあまりに、少と髻を詐って遊ぼうと、盗人が入りもしないのに「そりやそりや盗人よ盗人よ」と偽わる。その仕返しにシテが小舞をして見せるから、「相図には果てた所で其方が顔を撫でう、その時賛めよ」といい、全くは、髻が同じよう平家を語り、舞をまい、足で座頭の顔を撫でたりして興ずるということに終っている。
- 三人片輪——ある人が、片輪者を抱えるとの高札を出したところ、悪人（博徒）が座頭（盲）にまねて庸われ、次に二人目の悪者が髻者のように見せかけて抱えられる。更に第三の偽者は唾者となって巧く使用人となり、弓術、槍術が出来ると云う。以下つんぼ座頭とほぼ同形で主が四五日留守を命じた間に、各人本相を示し酒宴に興じているところに、主が帰宅して驚き憤る。結びは 丑「大盗人どもやらぬぞ」おし「あゝ許させられ許させられ」 主「やるまいぞやるまいぞ」となっている。不具片輪者を召使う

ため高札を立てるなどとの事は空想に過ぎないだろう。医術の発達しない時代だけに、社会に片端者が多かったらうことはこれらで想像される。

(4) 鬼，雷神，狐化等怪物

幻想的の狂言が観衆の注目をひきがちであることはいうまでもない。例えば鬼，雷，怪狐の類を狂言化したところに作者の想像力が知られる。その代表曲は

「こんくわい」（狂言記巻之二） 仏師（同，巻之三） 武悪（同，巻之五） 針立雷（続狂言記巻之一） 鬼の養子（同，巻之三） 狐塚（同，巻之四） 節分（同，巻之五）等である。

怪異なもの，不思議なものに興を抱くのは，人々のもつ通性である。珍稀のものがあると聴けば家を出ても見物にゆく。

- こんくわい（狐怪）——筆頭に狐の次第語があるが「われは化けたと思へども思へども，人は何とか思ふらん。これは此の所に住まひる古狐のこつちゅう」という句で初まっている。狐がその地で狸を好んでいる叔父の白蔵主に化け，その殺生の悪を意見しようという。「化けて出た狐が其方に意見したいことがあって，これ迄参った」と語り，長々と「狐と申すは皆神におわします。天竺にては斑足太子の塚の初，大唐にては幽王の后と現じ，我が朝にては稲荷五社の大明神にておわします……」と安部の泰成とか玉藻前とかの名を出してその甥に狐釣を断念さす。かくて狐は「人間といふものはあどないものぢや。叔父坊主に化けて意見をしたらば，まんまと騙されてござる」と小歌節を唄うて帰る。狐が化けるという類の民間説話は甚だ多く庶民は半信半疑ながら興を持ち，狂言の素材にも採用されたものである。
- 仏師——殊更鬼を中心とした喜劇ではないが光堂が完成したのに適当な本尊がないので，田舎者が京に仏を求めに出かける。悪心の者がいて自分を仏師だと告げ仏像を高く売りつけようとする。最後に，注文があったので，自分で鬼面をかぶり田舎者から金を取ろうとするというテーマ。
- 針立雷——簀医者，武蔵野を歩いている時，雷が落ちその雷が腰の骨を折

った。幸い医者に治療を依頼するが、雷の脈は頭脈と言って頭でみようとする。雷は中気の持病があると云われた上、腰の痛みには針を打つ。打った針を抜く時雷が痛がるが、一おう中気が癒る。しかし治療費をくれず、天上しょうとするから、医者が催促すると次に夕立の時落ちてきて支払い、医者を典薬の頭とうにすると云って天上の様子を謡にするから医者もそれに合唱せよと云う。全篇、幻想でまとめあげた所に観衆の喜びを求めている。

- 鬼の養子——播磨印南野で、子つれの女房がシテ鬼に出あう。鬼は子供をひとくち一口に食おうとするが、女が美人なので、伴れ帰り鬼の妻としょうと申し出る、女はそれを断るので、鬼は子を養子にするといつて、「此の子を肩に載せて囃子物で行かうほどに、其方まじも囃せ」と住居の蓬莱島に出かけるが、子供を見て「一口に食うてやろう」と鬼の本性を示す。結びは、「どうでも女房にせねばおかぬぞ。やるまいぞ、やるまいぞ」となっている。鬼の存在を信じた中古、中世、時代の一逸話だけのものである。

(その他「抜殻」「伯母が酒」も鬼の面をテーマとしたものである)

- 狐塚——「こんくわい」と同様、狐の化ける迷信を中心にした話である。アド主所有の田を鹿、猿などが、荒らすので太郎冠者に命じ殺さしにやる。主はさぞ太郎冠者が淋しかろうと、更に次郎冠者を後に小筒を持たせ、山田へ伽にやったところ、彼が「太郎冠者、やい何処いに居るぞ」と尋ねたのを、太郎の方は狐が化けて出たと解し、「よう化けた。其の儘の次郎冠者次郎冠者、捕へて縛ってやろう」と問答し、主が心配して後から駆けつけた時も、太郎は主を怪狐だという。それに「松葉で燻べる」とか「鎌を取って皮を剥あいでくれうぞ」とか云う。そこで主が太郎冠者が帰ったら、二人の手でゆり上げされて太郎冠者は「許ゆるさせられ、真平御許ゆるされ御許ゆるされ」と願う場面で終結している。
- 節分——主人が出雲大社へ年籠りに出かけ妻が留守居をしている所へ、蓬莱の鬼が節分の豆を拾いにくる。女は美人であったので鬼は、小歌まがいに「あら美の女房や、漢の李夫人、楊貴妃、小野の小町は見ねど知らねど（中略）其方の其の細い口で身おとこどもが頭喰あひついでたもれ」と遠望む。遂

に「まこと、妾を思ひなば宝をわれにたび賜へ」と云われ、隠れ簀、隠れ笠など総ての持物を与えることを約し、「時分でござる。豆をはやませう」「福は内福は内、鬼は外鬼は外」で終わっている。

(5) 泥棒と詐偽すり

現社会の中には盗難事件は断えることがない。盗みをするということは倫理道徳行為に反することはいうまでもないが、泥棒や詐偽の行為はとかく人の目に付きやすく話材になりがちである。狂言喜劇の人物に、それを出した例は諸国に見られる。こうしたテーマを興あるよう扱ったものが次の一類である。

胸つき（狂言記卷之二） 茶壺（同前） 柿山伏（同、卷之三） 太刀奪（同前） 長光（同、卷之五） 瓜盗人（続狂言記卷之三） 柑子俵（同、卷之四）

- 胸つき——登場人物は八兵衛と七兵衛との二人だけ。八兵衛はかつて七兵衛に金を貸していたので催促にゆくと七兵衛は留守居を使ったが見つかり捕えられて胸を討たる。七兵衛は肋骨が折れたと偽って八兵衛を殺人罪に訴えたとおどした所、気の弱い八兵衛は借金を許した上、手形まで渡して佯びるということで終わっている。
- 茶壺——人物は茶壺の持主、すり、および目代である。茶主、途中で居眠りしたところに、すりが来合わし目を覚ましてから連尺の持主を両人が争う。折から目代が出てきて、「論ずるものは中で取る」といって、目代が連尺を奪い取ってゆく。（以下省略）

(6) 言語、秀句

生捕鈴木（狂言記卷之二） 薩摩守（卷之三） 八句連歌（同前） 腹立てず（同卷之五） 連歌毘沙門（続狂言記卷之一） 秀句大名（同前） 毘布布施（同卷之三） 箕かつき（同卷之五）

- 生捕鈴木——歴史物の書替で、景時がある時重家を生捕すると語ったの

を、頼朝はシゲイエをスズキに誤聞したことを筋としたものである。

- 薩摩守——登場人物は茶屋、関東の愚僧、船頭の三人。愚僧、関東から大阪天王寺に参詣し、茶屋が勧めるので茶を飲んだが払いの金を持たぬ。次に神崎の渡を越える時、船頭が秀句を愛していると聞いて、只乗（平忠度を掛けたもの）といって巧く渡ったという咄である。
- 八句連歌——人物は庄右衛門と九郎次郎との二人。庄右衛門が九郎次郎に金を貸し催促に出かけるが、九郎次郎は連歌を好んでいると知り八句連歌を詠み初めると、先ず九郎は「花盛り御免なさじや松の花」というように機智をこめて詠み出し、結局、その借状を返すに終る。
- 腹たてず——鎌倉街道を背景として庄金屋と僧とが出場する。庄屋はそこに草堂を造り、適當の僧侶を入れる予定にしていたところ幸某僧がやってきた。そこで僧の名をきくと「腹たてずの正直坊」と名乗る。これは腹は立てぬが「背がたつはいの」と温厚の態度を示さないという筋のもの。
- 連歌毘沙門——初アド、後アド同道で鞍馬多聞天に参詣、お蔭で初アドが多聞天から福ありのみを授ったことをきき、後アドも欲しくなり、所有を連歌で定めようとすることになる。そこに多聞天（シテ）が現われ、鋒で福ありのみを削り、アドの二人は謡を唄って合唱する。
- 秀句大名——人物は八幡大名、冠者、遠島者の三人。シテの大名が遠島から帰って上京してきたものに秀句を云わす。例えば傘について「ほねを折って参った」「かみげにく」「傘にしま」など語るので、初めはその男を切殺すつもりでいた大名が携えた刀、上下、小袖かみしもの類をも惜しみなく与える。
- 毘布布施——施主（アド）貧男女、長老が登場人物であるが、アドが出家者には三貫、比丘尼には二貫を施すとの立札を立てる。ある貧乏男女が出家にまねてアドから八貫を施されようと出かける。実は「貫」は「毘布」であって、漸く八枚の毘布を受けとったにすぎなかったという。
- 箕かつき——連歌好のシテとその女房との出場。女房は連歌好が家産の倒れる所以だと、有名な古今集の序文「力をも入れずして天地を動かし、鬼神の心をも知らば」云々と引用するという筋のもの。

すでに酒を材料にしたものには二三触れてきたが、狂言集、続狂言集には飲酒に取材としたものが甚しく目立つ。もとより酔狂の姿は、観衆の興味を唆るものを含んでいるが、「悪坊」（狂言記巻之一）「内沙汰」（同二）「どこんさう」（同巻之三）「法師物狂」（同前）笠の下（同巻之四）河原新市（続狂言記、巻之一）鱸庖丁（同巻之二）暇の袋（同巻之三）寝声（同前）素袍落（同巻之五）の類を総覧するに、その多くは、シテ（主）に賞せられて宴会をするという場面を出しているだけのもので、狂言的の可笑をつねに誘うものではない。

(7) 聾嫁物、愚僧物等

次に聾物嫁物という一種がある。夫婦関係、結婚事件に取材したもので、現実的社会には到るところ見られる情景である。また狂言の観衆は、それとなく結婚、夫婦争、離婚、上臈ということに関心を持っていたことが推定される。その主要なものの題をあげると、「三吟聾」「貰聾」「かくすい（粹）」「相合傘」「釣り女」「花子」「算勘聾」などである。ただし、狂の意義が徹底しない欠点があって、ある曲は、田舎芝居を見せられているにすぎない筋のものもある。

最後に愚僧、白痴の類を取りあげたものについて考えて見るなら、賢に對し愚行というものは、なるほど、笑の種となる。しかし、山僧の愚行については、時に人々の憤りをさえひきおこす。室町時代には仏教が盛んになると共に、仏典について何等の智慧もないものが、各寺院に多かった。五戒を守ることとも理解せぬ出家が多かったものらしい。二百曲の中には、しばしば僧侶が出てくるが「鹿狩」「福渡」「六人僧」「俄道心」「路蓮坊主」などその代表である。愚僧とはいえぬが、山伏登場の曲は「苞山伏」「蟹山伏」など同様に指摘される。しかしこれらを見渡すに、可笑味が豊かでない。前述の聾物などと同様に、民衆の興味はあったろうが、作者の機智が現れていない。

惟うに狂言の文学性は、国文学として独自の地位を持っている。可笑は過

度になると雅趣を失ってくる。国民性として、日本人は快活な笑い方を知らぬと評されている。しかし、日本人は微笑において特殊のものを持っている。もとより、児童や少年やが、からからと大笑する例もないではないが、中年以上の日本人は互に見合った時、唇を閉じて優美な微笑を洩らさず、能楽の間で演出される。

- (1) 過度の物忘れ症
- (2) 無意味の論争
- (3) 不具者の奇行
- (4) 鬼，雷神，狐化等の出現
- (5) 泥棒詐偽やすり

等を見聞して、声高く嘲笑するであろうか。自分の知るかぎりでは、胸底で笑うものの方が多く、両手を打ち声を高くあげて笑う観衆は意外に少ないのではないか。これは、近世時代の洒落本、滑稽本、黄表紙等の草子を緇く人についても同様である。かかる態度は果して賞すべきものであるのか、否か。

以上、国文学史の一ジャンルとして狂言物の心理を問題としてみて来た。これは前年の紀要に連続しているものとして、特に選んだものであるが、疑問を提したいのは、既刊の文学史家が、狂言、川柳、狂歌、落語等に対し厳肅な鑑照、認識を欠いているかに思われる。例えばアメリカ人は、性来明かるい性格を持っているが、近世文学の落語の特殊性は理解出来ぬらしい。数年前から、留学している外人が落語会を作って習練している由聴いているが、落語師の目的は、聴衆をきやらきやら嗤わすだけのことではない。そこには、深刻な習練が基礎とならなければならぬ。聴衆、乃至落語ハウスに出入するものは、耳乃至物真似手真似をすることを主眼としてはならぬ。これは、勝負だけが、剣道柔道でない同一で、そこには、一つの道が立てられているのである。狂言に出場するものが、多く馬鹿や阿呆やであればそうした愚行に対する演者の厳正さが欲しい。これは、喜劇的のものだけでなく、悲劇の演出者についても考えられる。徒らに涙をそそぐ身振をするのが、悲劇俳優の主眼ではない。演劇が文芸の一ジャンルとして重んぜられる基本はそこであるのである。

なお狂言の可笑味，ユーモアについて附考すべき点に，舞台即ち背景の選択の問題がある。以上名曲名作とすべき狂言の内容について適宜その件を採りあげておいたが，狂言記のみの統計を勘定するとほぼ以下ようになる。

- (a) 京洛一帯の地に背景を選んでいるもの。
 - (b) 近畿関西地方の地を選んでいるもの。
 - (c) 東海道及び関東地方を背景に取ったもの。
 - (d) 中部地方及び東北地方の地名を出しているもの。
 - (e) 日本海の沿岸北陸道，山陰道の地を選んでいるもの。
 - (f) 西国，即ち山陽道，四国及び九州の地名を取入れたもの。
 - (g) その他
- (a) 狂言は多く能狂言として京師で上演されれから，その作者も旧京都の諸地を利用しているものが多い。しかしパーセンテージから云って洛内のものは比較的少ない。当時地方人が京の諸寺社に抜参り（太田傘等）するものが多く，（菊の花，その他）地方人田舎者が上京して，京の各地近郊を見物するとか，都の有様に驚くとかいう構想のものが可なりある。特に，主人の命をうけ京に旅して滑稽を演ずる筋のものが甚だ多い。見物人がそうした田舎者を軽蔑しているかぎり，地方人の愚行を描いた筋に座興を抱いた結果であることは十分に察せられる。但し都といっても三条（末ひろがり等）四条というような中心部の名はあまりに見えず，却て郊外の叡山，河野，鞍馬，梅尾，嵯峨（どぶかっち等）等の地名が多く出され，下京三条，清水，烏丸通，東山，阪本などが特殊の狂言において利用されている。概ね，狂言の愛好者が，近郊の住人に多かったものかと察せられるのである。
 - 近畿関西地方と云えば，大阪を中心に兵庫，奈良，和歌山，滋賀等の諸県を含むことになるが，これらを背景の地名にした狂言は最も多い。兵庫津（摂津一茶壺），芥川（摂津一姨子大黒天），生田の森（摂津一ひめ糊），鶴鳥越と須磨，明石（同前），西の宮（摂津一舟ふな），尼が崎（摂津一相合袴），丹波（丹波一柿壳），天王寺（摂津一薩摩守），和田（摂津

一朝比奈)，神崎渡（播磨一薩磨守），印南野（播磨一鬼の養子），大峯葛城（河内一柿山伏），かひ河（河内一どぶかつちり），西近江と東近江（近江一悪坊）淀（山城一鱸包丁）宇治（同一鱸包丁）大峯葛城（大和一蟹山伏），藤代（紀伊一生捕鈴木）等がある。

以上で注目されるのは，北方の丹波丹後が特に採られず南方，熊野，紀伊あたりが舞台背景に見えないことである。摂津の地名が多数に出てくることは，時代の姿を反映するものであろうか。要するに，他の区域に比較すると関西一面は種々の形で屢々題材に採られている。

。以上に比較すると，東海道関東一円は面積が広汎さに対し地名の出る曲が甚しく尠い。せいぜい西野（美濃），見付（遠江）富士山（富士松），鎌倉（腹たてずと藁葉練），武蔵野（針立雷），入間川（武蔵一入間川），那須野（こんくわい）の七八種の程度である。東北地方，中部地方の地名の出されている例もほぼこれに匹敵している。奥州立館（「生捕鈴木」）長野，身延山（信濃と甲斐一かくすい及び宗論），諏訪（信濃一法師物狂）などの地名が出てくるのみ。日本海岸の地名は一層少くなって単に越後，北越後（土産の鏡）とか，北出雲（節分）（土産の鏡）というように漠然と広汎の名が出されているに過ぎない。

。なお播磨以西は，ほとんど背景にとられていないが，疑問となるのは「茶壺」で主が「某は中国の者で御座る」と，毎年褥の尾に茶詰みに出かけることとなっているが，その中国は後の山陽道のことであるか，否か不明である。その他蓬萊島（節分），須弥山（荷文）という架空的の名を出した曲もあるが，一般に四国，九州など西国の地名がほとんど見られないのは，狂言を好む民衆が少なかった理由に帰せなければならぬ。

最後に論じ添えたい点は，狂言はわが文学史で民衆文芸の筆頭とされていることである。中世末期から，お伽草子，仮名草子，浮世草子など著わされ，近世文学は町人文学とさえ異称されている。たとえ読書力が現代のように普及し発達しなかった時代においても，狂言は対話，身振をもって民衆，大衆の生活に接近していった。しかしここには，大名（主），冠者が主役とされ

でも、深く庶民の心理に触れるものがあった。その主要をなすものは、「隠れもない大名」（烏帽子折その他）と名乗りをしながら、主人公はほとんど好人物であって、冠者が遅く参じようと「念なう早かった云々」。と推賞する。のみならず冠者（時にアド）がへまな失敗をしようと一切を見逃しにする主心なのである。この舞台芸は、如何ようにか民衆の肺腑に入ってかれらを喜ばしたかを想像せよ。多くの曲は、冠者が詫びながら、囃子、謡、俗歌、念仏などを唄い出すと、主（シテ）はすっかり悦に入って、折檻もしまじい程の、これ迄の姿を改めて合唱するといというところ結びとなっている、その他冠者に対し、京見物とか、京の店に買物をさせながら、冠者は自分の過失を棚にあげて、都の話を主に聞かすと、主は聞耳立てて京の話を聞き、冠者の過分を見すごす曲など十数曲に亘っている。阿呆と云えば阿呆の到りであるが、こうしたテーマに共鳴するところに庶民の良心が出ている。福渡の結末を見ても

▲くわじゃ鞍馬の太子多聞天の御願を主殿にまるらせたりや、まるらせた

▲とのたばつたりや たばつた ▲くわじゃまるらせた ▲とのたばつた。

▲くわじゃ申し殿様 ▲との何ちやぞ

▲くわじゃあゝと仰しやれませい ▲とのあゝ ▲くわじゃめでたい事がござりまする。奥歯が三本見えまする。寿命長うござりませう。▲とのそれこそめでたし、行て休めえゝ ▲くわじゃはゝ

上演用の対話であるからかように、強くきびきびと進められている。観衆も「あゝ」と唇を大きく開き奥歯を見せるまでして笑ったことであろう。